

平成29年(2017年)家計調査報告 (総務省統計局データより)

I. 家計収支の状況(二人以上の世帯)

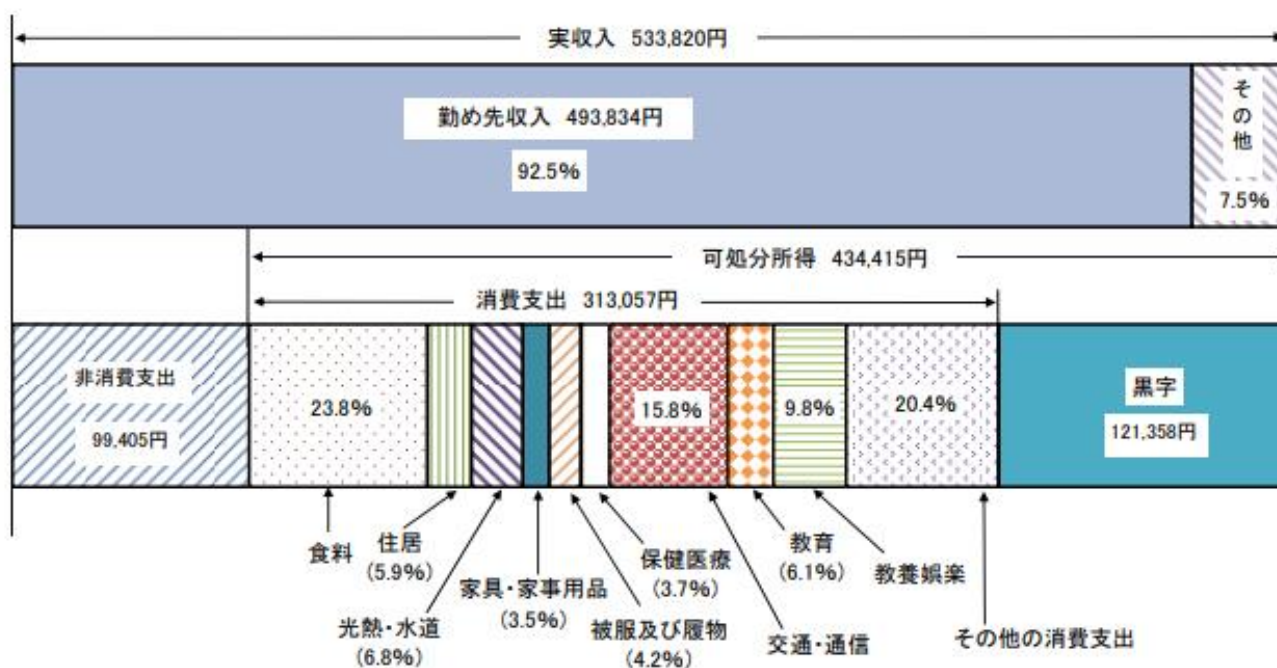
2017年の二人以上の世帯(平均世帯人員は2.98人、世帯主の平均年齢は59.6歳)の消費支出は、1世帯当たり1ヶ月平均283,027円で、前年に比べ実質で0.3%の減少となった。4年連続の減少である。

①勤労世帯(二人以上の世帯)の家計収支(平均世帯人員3.35人、世帯主の平均年齢49.1歳)

勤労世帯の実収入	533,820円(実質0.7%増加)
〃消費支出	313,057円(実質0.5%増加)
〃非消費支出	99,405円(名目1.1%増加)

非消費支出…世帯主だけでなく、他の世帯構成も含んだ直接税及び社会保険料等

二人以上の世帯のうち勤労者世帯の家計収支 —2017年—

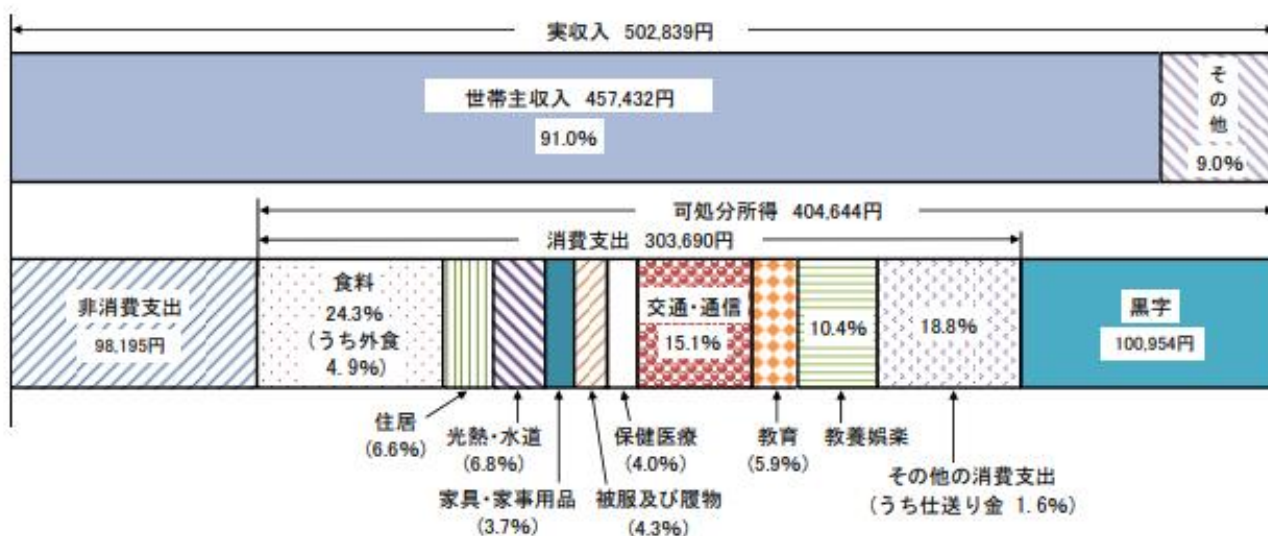


(注) 1 図中の「勤め先収入」及び「その他」の割合(%)は、実収入に占める割合である。
2 図中の「食料」から「その他の消費支出」までの割合(%)は、消費支出に占める割合である。

二人以上の世帯のうち勤労者世帯の平均消費性向は72.1%となり、前年に比べ0.1ポイントの低下となった。黒字は121,358円となり、前年に比べ名目1.9%の増加となった。黒字率は27.9%となり0.1%の上昇となった。

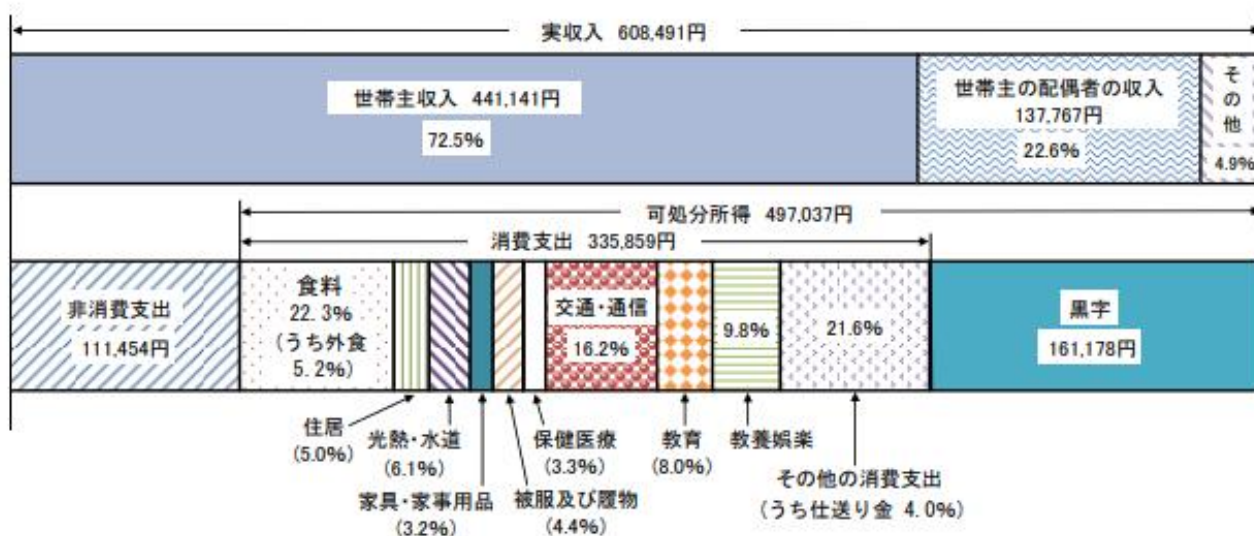
⇒実収入、可処分所得ともに前年に比べ増加しているものの、消費には向かわず預貯金等の資産の増加へ向かっており財布のヒモはかたくなっていると言える。

(1)二人以上世帯の勤労者世帯のうち「夫のみ有業の世帯」の家計収支 —2017年—



(注) 1 図中の「世帯主収入」及び「その他」の割合 (%) は、実収入に占める割合である。
 2 図中の「食料」から「その他の消費支出」までの割合 (%) は、消費支出に占める割合である。

(2)二人以上世帯の勤労者世帯のうち「夫婦共働き世帯」の家計収支 —2017年—



(注) 1 図中の「世帯主収入」、「世帯主の配偶者の収入」及び「その他」の割合 (%) は、実収入に占める割合である。
 2 図中の「食料」から「その他の消費支出」までの割合 (%) は、消費支出に占める割合である。

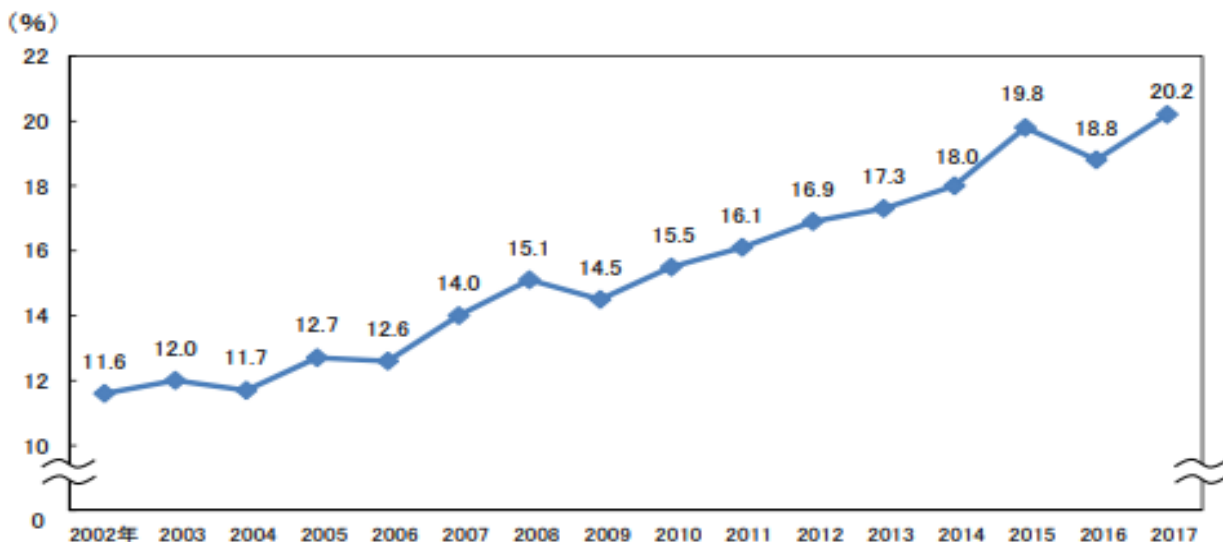
二人以上の勤労世帯のうち、夫のみ有業と夫婦共働きを比較すると、実収入は夫のみ有業 502,839 円、夫婦共働き 608,491 円と 105,652 円の開きがあり、それぞれの黒字は、夫のみ有業 100,954 円、夫婦共働き 161,178 円となっている。支出では夫婦共働き世帯で教育・仕送り金の支出割合が高くなっている。

<参考>勤労者世帯のうち世帯主が60歳以上の世帯割合が増えています

世帯主が60歳以上の世帯割合の推移（二人以上の世帯のうち勤労者世帯）

高齢者雇用安定法の改正のより、2006年4月以降、事業主に(1)定年の引上げ、(2)継続雇用制度の導入、(3)定年の定め廃止のうちいずれかの措置（高齢者雇用確保措置）を講ずる義務が課されたため、2006年以降60歳以上の勤労者世帯の割合は上昇する傾向にある。

図 世帯主が60歳以上の世帯割合の推移（二人以上の世帯のうち勤労者世帯）

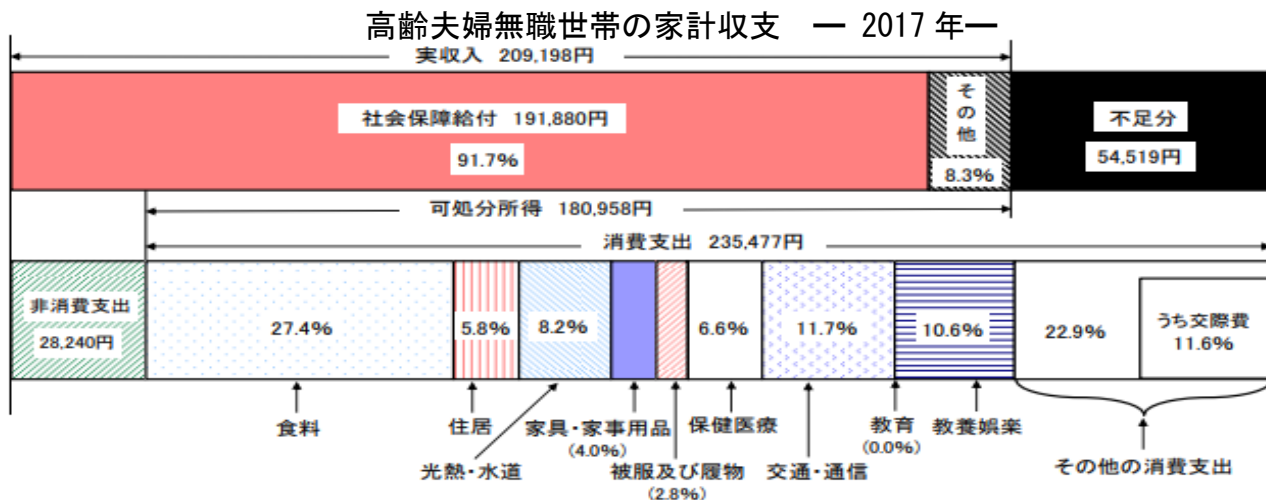


②高齢夫婦無職世帯（二人以上の世帯）の家計収支（夫65歳以上、妻60歳以上、夫婦のみ）

無職世帯の実収入 209,198円（実質2.3%減少）
 // 消費支出 235,477円（実質1.5%減少）
 // 非消費支出 28,240円

// の家計収支は、**54,519円の赤字**となる。

不足分については、預貯金の取崩し等により賄っていると思われる。



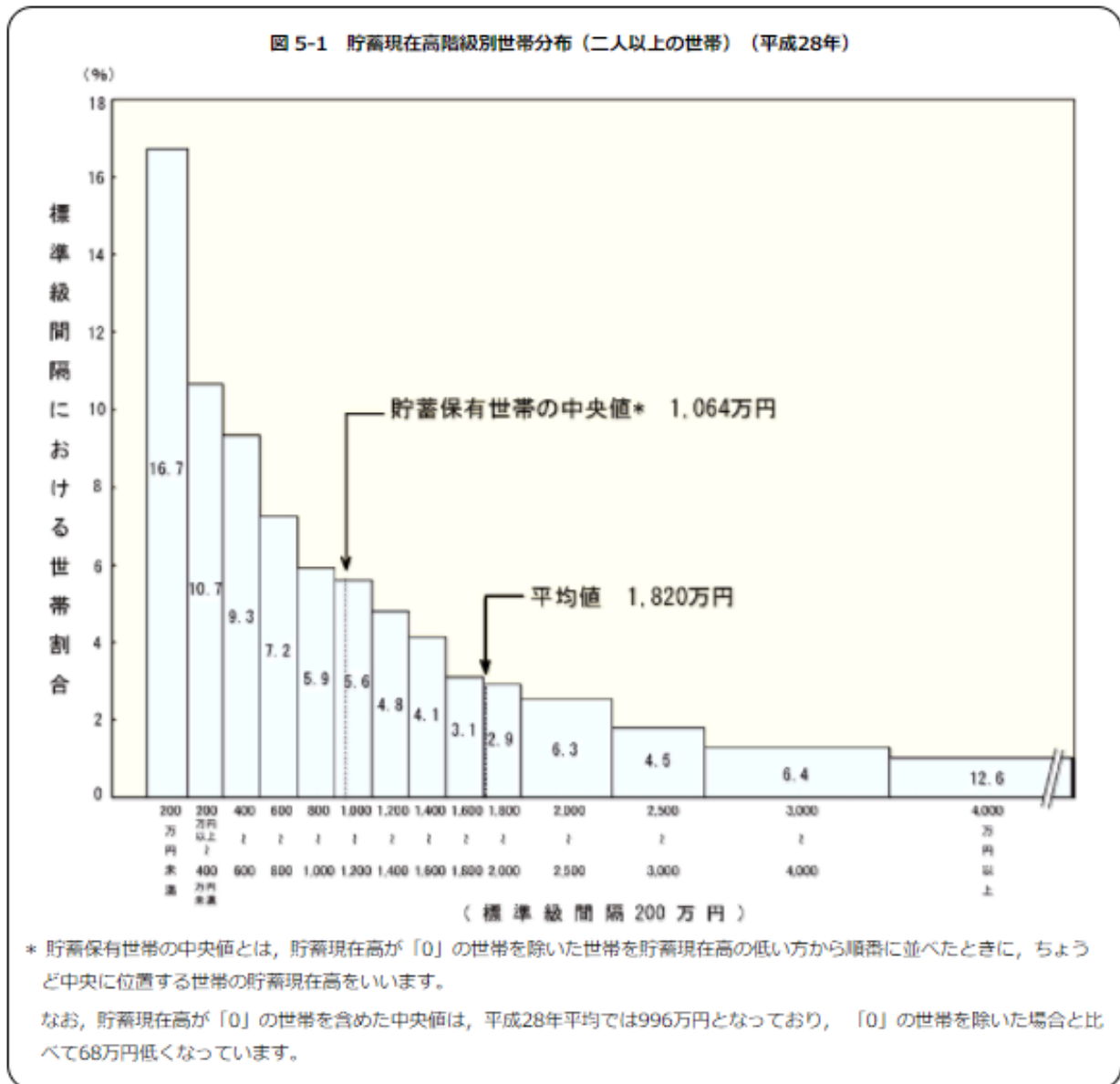
(注) 1 高齢夫婦無職世帯とは、夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの無職世帯である。
 2 図中の「社会保険給付」及び「その他」の割合(%)は、実収入に占める割合である。
 3 図中の「食料」から「その他の消費支出」までの割合(%)は、消費支出に占める割合である。

II. 家計資産について

資産の状況は、消費の動向に影響を与えます。二人以上の世帯の貯蓄や負債の状況について見ていきます。

①貯蓄額別の世帯分布 ～貯蓄現在高の平均値を下回る世帯は全体の約3分の2～

二人以上の世帯の貯蓄現在高は平均では1,820万円です。ただし、世帯を金額の低い世帯から高い世帯へと順に並べたときに、ちょうど中央にあたる世帯の貯蓄現在高は1,064万円と平均を大きく下回っています。これは貯蓄の多い世帯が平均を押し上げているためです。

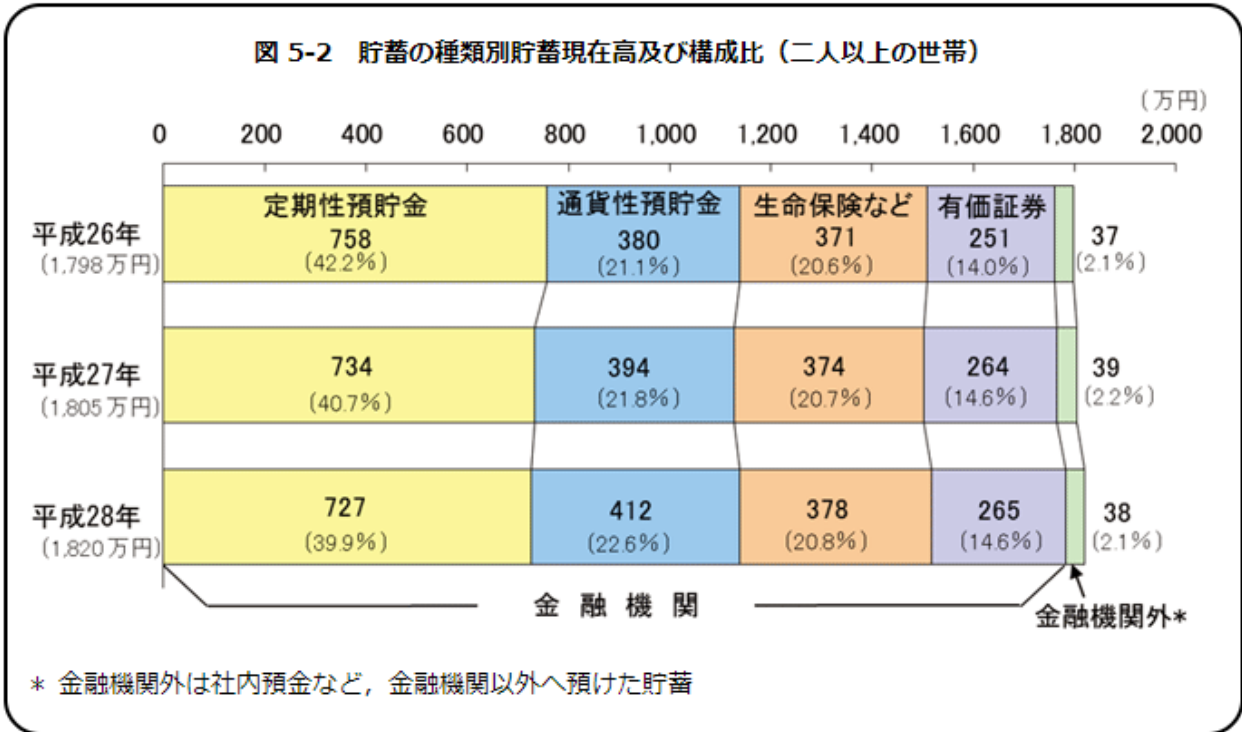


●統計豆知識● ～平均値と中央値～

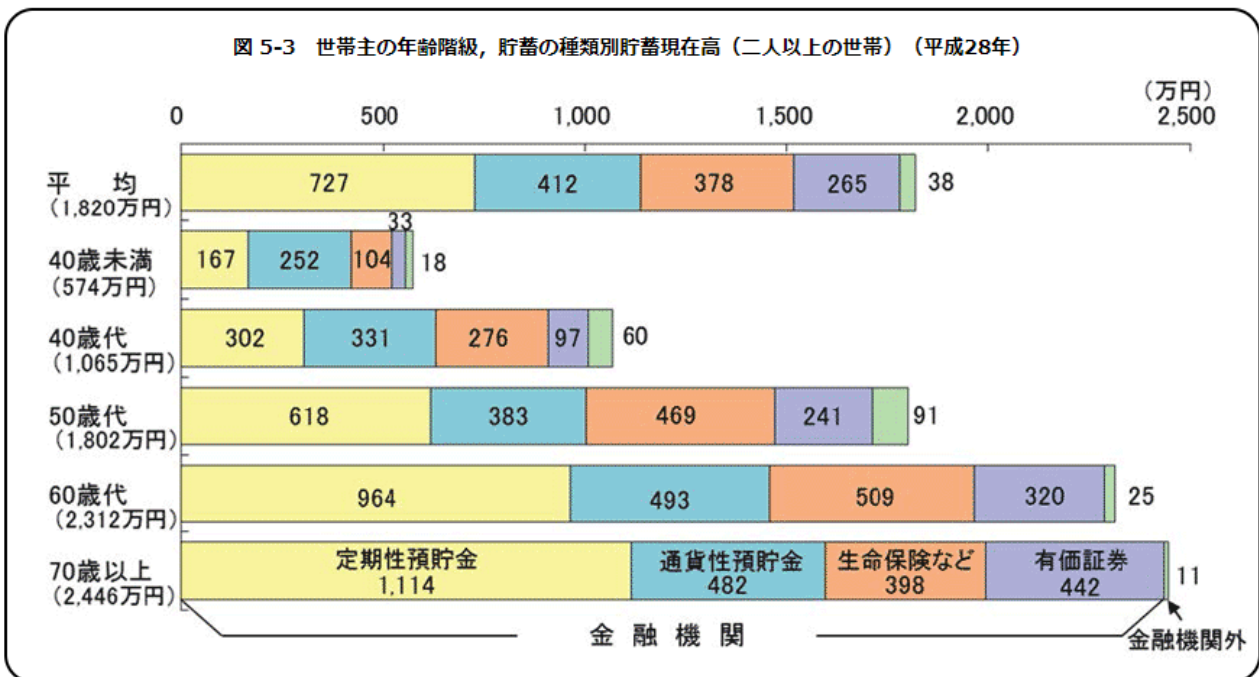
たくさんのデータを集めた統計を解り易く表すためによく使われるのが平均値です。富士山のように左右対称に広がって分布しているときには平均値が実感に合っています。ところが上の貯蓄のように左側から右肩下がりのグラフになる時には平均は必ずしも実感と合いません。このような場合には、額の低い方から数えた真ん中の世帯の額（中央値）が実感により合った額を示してくれます。

②貯蓄の種類別の状況 ～通貨性預貯金は8年連続の増加（二人以上の世帯）～

平成28年の二人以上の世帯における貯蓄現在高の内訳をみると、銀行の普通預金などの通貨性預貯金が前年に比べ18万円増加し8年連続の増加となっています。一方で定期性預貯金は善人に比べ7万円の減少となっています。



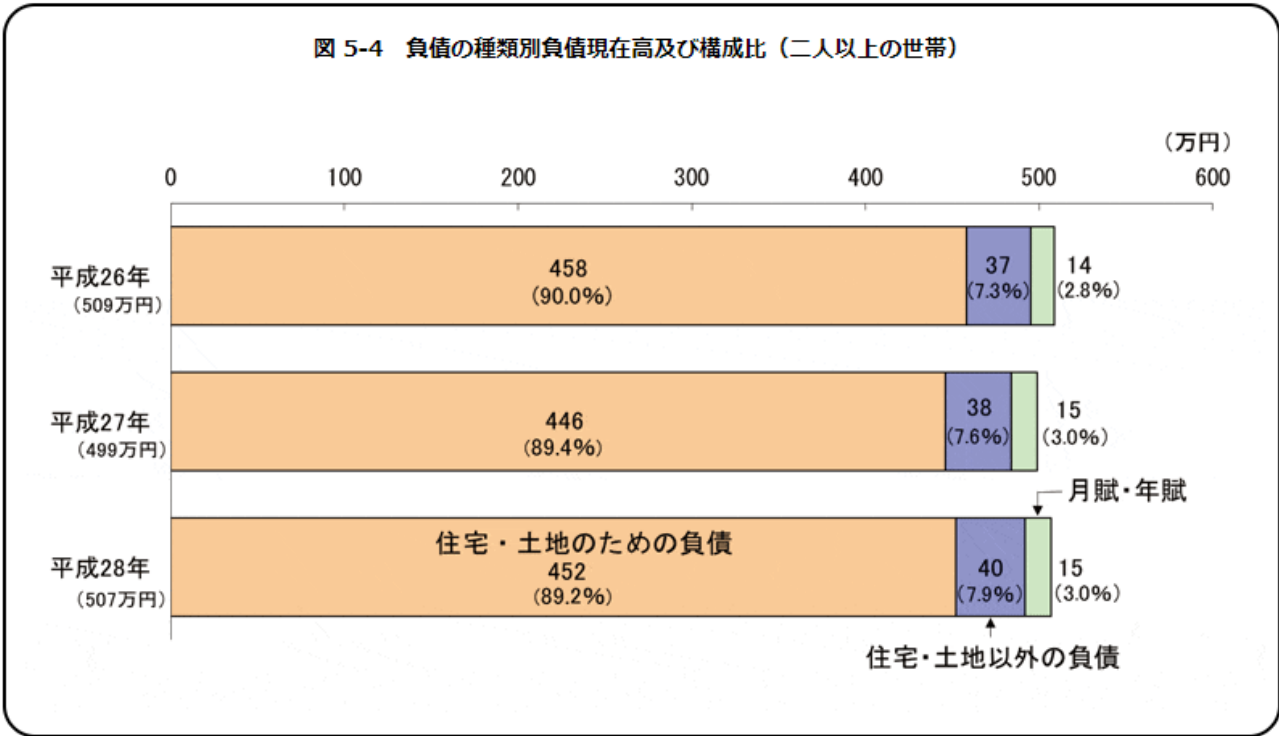
貯蓄現在高の内訳を世帯主の年齢階級別にみると、50歳以上では定期性預貯金が最も多く、40歳未満は通貨性預貯金が最も多くなっています。また、有価証券は70歳以上で最も多くなっています。



③負債の種類別の状況

～負債現在高の約9割を占める住宅・土地のための負債（二人以上の世帯）～

平成28年の二人以上の世帯における負債現在高は、前年から8万円増加し507万円となっています。内訳をみると、住宅・土地のための負債が452万円と最も多く、全体の89.2%を占めています。



負債現在高の内訳を世帯主の年齢階級別にみると、住宅・土地のための負債は40歳未満が最も多く1,041万円となっています。50歳代以降では、住宅・土地のための負債は減少しており、高齢になるにつれ住宅ローンの返済が進んでいることがうかがわれます。

